芥川也寸志―黒沼ユリ子 異色の初顔合せ!!

新響 新春特別演奏会

指揮
芥川也寸志
独奏
黒沼ユリ子
演奏
新交響楽団



■バッハ＝ストコフスキー
パッサカリアとフーガ ハ短調
■メンデルスゾーン
ヴァイオリン協奏曲 ホ短調
■マーラー
交響曲第一番ニ長調「巨人」

2月7日(月)
P.M.7：00開演
日比谷公会堂



S：1500円
A：1200円
B：1000円
C：800円
D：600円
(全指定席)

■都内各プレイガイドにて発売中

主催
総合文化社
後援
TBS＝東京放送

新交響楽団＝芥川也寸志と世界的ヴァイオリニスト黒沼ユリ子がメンデルスゾーン「ヴァイオリン協奏曲」で初の協演!!

■お問い合わせは (363) 1561・1562

黒沼ユリ子

1956年 桐朋学園音楽科在学中に第二十五回音楽コンクール第一位並びに特賞を受ける。

1958年 プラハ音楽アカデミーに入学し、F・ダニエル教授に師事。さらにH・シェリング、D・オイストラフにもついて研鎖をつむ。

1960年 プラハ現代音楽演奏コンクール第一位。

1962年 音楽アカデミーを主席で卒業し、栄誉賞を受く。

1963年 メキシコに渡りメキシコシティーでリサイタル開催日本でも帰国記念リサイタルを開いて楽界の注目をあびる。

1970年 12月には、チェコ国立放送交響楽団の定期公演に招かれ、プラハでチェコの現代作曲家イルジ・ヤロックのバイオリン協奏曲の世界初演を行う。

1971年 1月にはウィーンでトンキュストラ響と協演。
日本に帰国して演奏活動を行ない、3月には再び渡米してシカゴ交響楽団との協演やリサイタルを行なう。

1972年 1月8日再びシカゴ響との協演が決定。
渡米する予定。

新響紹介

新交響楽団

新交響楽団、新響は名前こそN響の前身の名前と同じですが、純然たるアマチュアのオーケストラで、サラリーマン、学生、主婦など音楽を職業としない120名の団員から成り、月々400円の団費と演奏会の収入による独立採算で運営されています。

42年秋のソ連旅行、44年秋の沖縄九州旅行という華やかな活動がある反面、実質的には何の拘束もない任意団体で、週1回2時間半の練習では、全員が常に出席という訳にも行きませんから、極端に言えば常に解体の危機に瀕しています。私達を結びつけるものは一諸にアンサンブルを創るという一点にしかありません。2～3回の練習で演奏会をもつというプロのオーケストラにはできないような、すみずみまで奏きこんだ演奏をモットーとし、毎週の練習自体をも一つの目的とする緊張と充実が団員の共通目標になっています。

新響のもう一つの目的は、オーケストラを団員の自己満足としてでなく、なるべく沢山の人々に演奏を聴いてもらいたいという、演奏団体としての活動です。

今年から新たに若手指揮者のホープ小林研一郎氏を指揮者として正式にお願いし、芥川先生とタクトを分担して頂くことになり、外部からの依頼に応じられる演奏団体としての体制をととのえつつあります。

《ベートーヴェン弦楽四重奏団》

■ **虎の門ホール公演　6：30**

1月24日＝ベートーヴェン／弦楽四重奏曲第7番他
1月27日＝シューベルト／弦楽四重奏曲第14番他

■ **郵便貯金ホール公演　6：30**

2月4日＝ベートーヴェン／弦楽四重奏曲第14番他
2日5日＝シュスタコヴィチ／ピアノ五重奏曲
（ピアノ＝室井摩耶子）

最高級の音楽芸術、他に類を見ない卓越した演奏技術と格調高い詩情は、この四重奏団の不滅の名声と人気の真の基盤である。

——ディミトリー・ショスタコヴィチ——

主催／読売新聞社・**後援**／ソ連大使館・**協賛**／日本ビクター・**お問合せ**／（363）1561・1562

《国立モスクワ放送交響楽団》

指揮　ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー
独奏　ビクトリア・ポストニコワ

5月8日 7：00　東京文化会館
9日 7：00　東京文化会館
27日 7：00　渋谷公会堂
28日 7：00　渋谷公会堂

■ ロジェストヴェンスキーとモスクワ放送交響楽団のコンビがこれほどまでのものとは……あえていえば世界一・二を競うところまできていようとは……考えてもいなかったので完全にドギモを抜かれた。モスクワ最後の晩さんをしたためるべく会場を出るとすでに戸外は大変な寒さであったが演奏会の興奮さめやらぬ我々の熱気をこの雪でさえもさますことはできなかった。
72年にはいよいよ彼は自分のオーケストラをつれてやってくる。これは我々にとって大きな楽しみである。
——**作曲家**　諸井誠氏　1970年12月19日付朝日新聞より——

■ ビクトリア・ポストニコワの演奏を生れてはじめて聞く者にとっては、彼女がもたらす異常なまでの感動は生涯忘れることの出来ない印象となって残るであろう…。
—英紙タイムス—